レクリエーションの専門志向化：その研究動向と方法論

二宮浩彰¹⁾ 菊池秀夫²⁾ 守能信次²⁾

Recreation specialization: A review of literature and methodology

Hiroaki Ninomiya¹, Hideo Kikuchi² and Shinji Morino²

Abstract

The concept of “recreation specialization” is a developmental process which occurs as a result of participation in a particular leisure activity. Bryan (1977) defines recreation specialization as a “continuum of behavior from the general to the particular, reflected by equipment and skills used in the sport and activity setting preferences”. This conceptual framework has been considered as an effective explanatory variable to differentiate outdoor recreationists. The purpose of this study is to review the literature related to recreation specialization and examine the kinds of methods used in leisure research. Literature pertinent to recreation specialization is classified into theoretical development and application. Methodological issues are discussed based upon an overview of this specialization research. This paper is organized into five topics: 1) theoretical background, 2) related concepts, 3) theoretical development, 4) empirical studies, and 5) methodology.

Key words : leisure behavior, specialization continuum, conceptual framework

(Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 47: 319-331, July, 2002)

キーワード：レジャー行動、専門志向化の連続体、
概念枠組み

I 緒 言

レジャー行動研究は、人々が自発的に自由時間を活用してレジャー活動に参加する過程において生じる諸事象を社会科学のパラダイムに従って解明しようとする学問領域である。わが国における

レジャー行動研究は、その歴史がまだ浅いため、諸外国で行われてきた研究知見を取り込んでいくことで、今後の発展が期待される領域である。諸外国におけるレジャー行動研究の動向については、原田（1989）が社会学的研究、心理学的研究、経済学的研究、地理学的研究に分類してまとめており、そのレビューにはわが国のレジャー行動研究にとっても示唆に富む研究成果が多くみられる。そのなかの1つに、理論、方法論の両面にお

1) 大分大学経済学部

〒870-1192 大分県大分市旦野原 700 番地

2) 中京大学体育学部

〒470-0393 愛知県豊田市貝津町床立 101 番地

連絡先 二宮浩彰

1. Oita University, Faculty of Economics

700 Dannoharu, Oita, Oita, 870-1192

2. Chukyo University, School of Health and Sport Sciences

101 Tokodate, Kaizu, Toyota, Aichi 470-0393

Corresponding author hnino@cc.oita-u.ac.jp

いてレジャー行動研究の発展に寄与してきた「レクリエーションの専門志向化^{注1)}」という概念がある。

「レクリエーションの専門志向化」研究は、スポーツ・フィッシングを取り上げた論文“Leisure Value Systems and Recreational Specialization”のなかで、Bryan (1977) によって新しい概念が提唱されたことに始まる。この論文では、フィッシング参加者が経験を重ねていくことで、使用する用具を取り揃え、必要な技術を習得し、活動する場所を選択して取り組むようになり、行動様式を発達させると同時にレジャー活動に対する態度を変容させていくことが説明されている。

Bryan (1977) は、フィッシング参加者を一連の4つのタイプに類型化した。図1に示したように、フィッシングを始めたばかりで参加回数が少ない「不定期参加者 (Occasional Fishermen)」は、安価な用具を用いてどんな魚でも釣ろうとする傾向にある。やがて一通りの技術を身につけるようになると、参加者は「ゼネラリスト (Generalists)」になり、ルアー・フィッシングの用具を使ってマス釣るようになる。「技術のスペシャリスト (Technique Specialists)」にまで上達すると、参加者は特殊な技術を使いこなし、大型マスをフライ・フィッシングの用具で狙うようになる。さらに釣り場の状況にこだわり、「技術と場面のスペシャリスト (Technique-Setting Specialists)」となった参加者は、より厳しい条件でのフライ・フィッシングに挑戦するようになる。このように、Bryan (1977) はスポーツ・フィッシングにおける典型的な発達パターンを示して、レクリエーション参加者がたどる専門志向化の発達過程についての概念を提唱した。

さらに、Bryan (1979) による著書“Conflict in the Great Outdoor”では、野外のレクリエーション空間を共有する参加者間において生じるコンフリクトの問題^{注2)}が取り上げられ、専門志向化の観点からレジャー行動の相違が論じられている。つまり、レクリエーション参加者は、専門志向化の発達過程をたどることによってレジャー活

図1 フィッシング参加者のタイプとその特性 (Bryan, 1997 に基づいて作成)

動に対する態度や価値観を形成し、それぞれのステージに応じた行動様式でその活動に取り組むようになるのである。

Bryan (1977, 1979) による一連の研究は、レクリエーション参加者がたどる専門志向化の発達過程に着目することによって参加者を捉えようとしたことに意義がある。レジャー行動研究の多くは、人口統計学的要因や行動特性などから参加者を類型化することで、それぞれがレジャー活動に対して同質の期待や欲求をもつグループであるかのように捉えている。そのために、特定のレジャー活動に取り組んでいる参加者個々人の行動様式における相違性が見逃されることがある。Bryan (1977, 1979) が用いた枠組みでは、専門志向化の発達過程におけるステージの違いによってレクリエーション参加者を類型化し、行動様式において同質性が認められるグループごとの行動を分析するのである。その研究成果は、野外環境に対して異なる期待や欲求をもつ下位グループの行動を把握することに役立ち、参加者が自然資源を効率よく利用できるようにするためのマネジメント上の情報を提供することにつながる。このようなことから専門志向化の概念は、野外におけるレジャー行動研究に導入されるようになり、多くの研究者によって理論の検証が行われたり、応用研究が

積み重ねられたりしてきた (Bryan, 2000).

しかしながら、専門志向化の概念を扱った研究は、レジャー行動における重要な研究領域になっているにもかかわらず、体系的なレビューはこれまで行われてきていない。専門志向化研究の発展のためには、蓄積されてきた研究成果の整理が必要である。また、わが国においては、原田 (1982, 1989) が諸外国におけるレジャー行動研究の動向をレビューしたなかで専門志向化研究についても取り上げているが、当該概念を用いた基礎研究や応用研究はほとんど手つかずの状態である。専門志向化研究の観点から日本人のレジャー行動を理解する視座を得るためにも、先行研究の方法や成果から知見を得ることが望まれる。

このような状況を鑑みて、本研究では、「レクリエーションの専門志向化」の概念に焦点を当て関係文献などのレビューを行い、その研究動向と方法論を体系的に整理しながら検討することを目的とする。

II レビュー研究の手続き

主として「レクリエーションの専門志向化」研究は、野外におけるレクリエーションの歴史が長い北米において盛んに行われてきた。そのため、専門志向化に関係する文献の収集にあたっては、カナダの SIRC (Sport Information Resource Centre) (2000) が提供しているデータベース “Sport Discus” を用いて検索することにする。“Sport Discus” は、スポーツ医学、スポーツ心理学、スポーツ社会学、バイオメカニクス、コーチング、レクリエーションなどのスポーツ全般にわたるトピックスを網羅している^{注3)}。このデータベースを用いて “recreation specialization” をキーワードとして検索した結果、過去 25 年の間 (1975—2000 年) に公表された、修士論文、博士論文 (Donnelly, 1985 ; Virden, 1986 ; Scott, 1990), 研究雑誌, 書籍, 未発行文書による 35 件の文献を探し出すことができた。これらの文献を整理するにあたっては、系統的なレビューを行うために、研究雑誌に掲載された専門志向化を主要

テーマとしている理論研究・実証研究 (17 件) に焦点を絞り、それらを中心にして関連する文献を補足的に加えていくことにする。それを基盤としたレビュー研究は、専門志向化の研究動向および方法論について検討していくために、次のような構成で整理してまとめていくことにした。

1. 理論的背景：専門志向化の概念構築において取り入れられた諸学説や理論に遡って、概念枠組みが導入されるに至るまでの理論的背景を明らかにする。

2. 周辺概念：専門志向化の概念とその周辺概念との関係について、社会心理学の領域に含まれる関与やコミットメントの概念との関係から言及する。

3. 理論展開：専門志向化理論の構築に貢献してきた理論研究において検討されてきた議論を集約しながら、その展開をみていく。

4. 実証研究：レクリエーション参加者を類型化するための概念枠組みとして専門志向化を導入した実証研究による成果をまとめる。

5. 方法論：対象レジャー活動、データ収集、測定指標、サンプルの類型化といった専門志向化の実証研究で採用されている方法について吟味する。

III 研究動向と方法論

1. 専門志向化の理論的背景

専門志向化の概念構築においては、心理学における学習理論や強化理論が根底となっており、とくに社会行動の基本形態を解説したホーマンズ (1978) による「人間の行為と好ましい結果との結びつきを扱った成功命題」と「報酬を頻繁に受けることによる飽きの状態を扱った剥奪—飽和命題」に由来するところが大きい。これらの命題による「人間はある行為による報酬が動機づけとなり同じ行為を反復するが、同じ報酬を繰り返し受けるとその行為に飽きるようになり新たな価値を求める」ということが専門志向化における発達過程の基礎となっている。さらに、レクリエーション参加者の規範、期待、役割、そして固有の知覚

的図式がレジャーの社会的世界 (leisure social world)^{註4)} において形成されること (Devall, 1973) については、準拠集団の観点からの影響を受けている。そして、Bryan (1977, 1979) は、Kelly (1974) が提唱したレジャーの社会化 (leisure socialization) の理論を援用して、時間の経過による学習過程を理論的根拠とした、専門志向化の概念における発達過程の枠組みを設定するに至っている。

初めにBryan (1977) は、専門志向化の概念による枠組みをスポーツ・フィッシングに導入し、「レクリエーション参加者は一般から特殊に至る行動の連続体に配列される」ことを提示した。この連続体の一方の端にはフィッシングというレジャー活動に一般的な関心をもつ参加者が属し、もう一方の端には行動様式が特殊化している参加者が属している。すなわち、レクリエーションの専門志向化とは、「スポーツで使われる用具や技能、そして活動場面の選好によって反映される、一般から特殊に至る行動の連続体である」(Bryan, 1977, p. 175) と定義されている。彼はこの概念枠組みを用いて参加者の類型化を行うことで、さまざまな特性を有したフィッシング参加者が、専門志向化の連続体に沿って配列されることを検証した。そして、スペシャリストが同様の態度、信念、イデオロギーをもち、レジャーの社会的世界において準拠集団としての役割を果たすことを明らかにしている。この研究から、「レクリエーション参加者は、時間の経過とともに専門志向化の高いステージに移行し、態度や価値観が変化していく」(Bryan, 1977, pp. 185-186) という仮説が導かれている。

さらにBryan (1979) は、さまざまなレジャー活動への適用可能性を検討するため、専門志向化の概念を帰納的に例証した。Bryan (1979) は、スポーツ・フィッシングの研究から導かれた命題を、フォトグラフィ、ハイキング、クライミング、スキー、カヌー、バードウォッチング、ハンティングといったレジャー活動に適用している。多種目のレジャー活動にわたる事例研究では、文献調査とインタビューから得られた情報を基にして、

それぞれの活動についての専門志向化の連続体における発達過程が解説されている。

2. 専門志向化の概念と周辺概念

専門志向化の概念は、レジャー用具を扱った消費者行動研究の分野においても取り上げられており、学際的な立場から専門志向化の概念と関与 (involvement) 研究との整合性が確かめられている (Bloch and Bruce, 1984; Bloch et al., 1989)。レジャー行動研究の分野では、専門志向化の測定指標をめぐるコミットメントや関与の概念との関係が議論されている (Buchanan, 1985; McIntyre and Pigram, 1992; Kuentzel and McDonald, 1992)。

Bloch and Bruce (1984) は、消費者行動論における製品関与モデルに専門志向化の概念を導入し、レジャー行動理論の適合性について検討している。このモデルにおいては、特定のレジャー活動に熱中することによって用具に対する関与がさらに高まり、より特殊化した用具を使用することになることが説明された。また、Bloch et al. (1989) は、製品関与の構造モデルを用いてレジャー用具における関与の特徴を概念的、実証的に検証している。その結果として、レジャー用具への関与については、心理的コミットメントと行動的コミットメントに影響されるが、専門志向化概念の重要な変数である経験年数とは関連がないことが明らかにされた。

Buchanan (1985) は、専門志向化の概念で説明されている連続体のなかでのコミットメントの位置づけを提示して、専門志向化レベルとの関係について議論している (図2)。連続体の下限は、たまにしかレジャー活動に参加しない低いコミットメントの「不定期参加者」である。連続体の上限は、技術と場面選好において専門志向化された高いコミットメントの「技術と場面のスペシャリスト」である。ここで問題にされた点は、従来の専門志向化研究 (Bryan, 1977) が観察可能な要素だけを取り上げて、レクリエーション参加者を連続体に配列していることである。これに対して Buchanan (1985) は、コミットメントが測定の

図2 「レクリエーションの専門志向化」の連続体 (Buchanan, 1985に加筆)

構成要素として含まれていないために、レジャー活動の参加によって位置づけられる「役割の重要性」のような観察不可能な感情的愛着 (affective attachment) の次元が見逃されていることを指摘した。

これと同様の指摘が、McIntyre and Pigram (1992) によってなされている。彼らはレジャー活動への参加により発達していくコミットメント、自我関与、永続的関与のような感情的愛着が、Bryan (1977) による専門志向化の測定には含まれていないことを主張し、これを補うためのより包括的な専門志向化のモデルを提示している。このモデルにおいては、従来までの測定に用いられていた行動局面と認知局面に加えて、感情局面がループとして連結され、それらが互いに影響し合い強化されることが強調されている。

測定指標の多次元化に対しては、Kuentzel and McDonald (1992) がコミットメントや関与の次元が含まれていることによって、専門志向化の連続体を説明することに理論的限界があるとの見解を示している。先行研究で扱われてきた測定指標の適合性について検証した結果、因子分析により抽出されたコミットメント次元とライフスタイル次元の項目においては、経験次元の項目との間に相関関係が認められなかった。その原因は、多次元の測定指標が専門志向化の発達過程の複雑さに十分に対応していないことにある。つまり、レクリエーション参加者は経験を重ねていくことで専門志向化の発達過程をたどるが、それと同調してコミットメントの程度が高まらないことも起こり

うる。このような現象に対応するために、彼らはコミットメントの項目を探索的に吟味し測定の妥当性を高めることと、専門志向化研究において時系列的な分析を取り入れるべきであることを提唱している。

3. 専門志向化理論の展開

専門志向化の概念がBryan (1977) によって提唱されて以来、レジャー行動の研究者によりその理論の構築が試みられてきた。専門志向化を扱った理論研究においては、階層モデルの提示、専門志向化レベルの比較、専門志向化の再概念化、適用範囲の拡大、概念枠組みの比較、といった検討が重ねられて数々の知見が得られている。

ボート活動の専門志向化を扱った Donnelly et al. (1986) は、日帰りボーター、宿泊クルーザー、レーサーという下位活動で構成されるピラミッド型の階層モデルを提示している。このモデルでは、下位活動間における専門志向化の程度と範囲の違いについての仮説が検証されている。その結果として、階層上部の下位活動の方が、専門志向化の程度 (指標得点の平均値) が高くなるという仮説は部分的に支持された。しかし、専門志向化の範囲 (指標得点の標準偏差) が狭くなるという仮説については相違がみられなかった。このことについては、下位活動に属するグループの専門志向化レベルの標準偏差を範囲として捉えたことによる操作上の問題点が指摘されている。

Kuentzel and Heberlein (1992) は、ハンティング参加者の専門志向化レベルの相違が実際の選

択行動にどう影響するのか、ということに注目した。この研究では、狩猟区域とその区域外で活動する参加者を研究対象とすることで異なる活動場所を選択した参加者を比較しているが、すべての専門志向化の次元において両方の参加者が同質であることが明らかにされている。つまり、専門志向化レベルは、活動場所の選択行動だけで推定することが困難であることが分かった。

社会的世界の観点から Ditton et al. (1992) は、専門志向化の概念を次のように再概念化している。すなわち、専門志向化とは「レクリエーションの社会的世界を細分化して新たな下位グループに類型化する過程であり、連続体に沿ってこれらの下位グループとその成員が配列されて起こることである」(Ditton et al., 1992, p. 39)。彼らは、専門志向化レベルの高い成員ほど、①自然の特性やレジャー活動の対象である自然資源への依存が高く、②レジャー活動の情報源となるメディアへの接触が高く、③レジャー活動の体験から得られる直接的な便益を重要視しない、ことについて検証を行い、専門志向化の概念を拡張した。

Scott and Godbey (1994) は、野外環境と無関係な活動であるトランプゲームにおける社会的世界を取り上げ、半年間に及ぶフィールドワークを実施することでブリッジ・プレイヤーのタイプについて調べた。この研究によって、タイプの異なるプレイヤーの存在が割り出され、専門志向化の概念がトランプのような室内で行われるレジャー活動においても有効であることが確認されている。さらに彼らは、ブリッジ・プレイヤーが社会的に参加するのか、本格的に参加するのかを自己規定し、異なったキャリア経路によってレジャー活動に適応していくことを発見した。つまり、社交的なプレイヤーは本格的なプレイヤーになることを望んでおらず、それぞれのプレイヤーはブリッジの社会的世界における専門志向化の連続体に配列されるのではなく、異なる社会的世界の成員であることが明らかにされている。このことは、ある特定のレジャー活動に取り組む参加者が「時間の経過と共に専門志向化の連続体に沿って高いステージに移行する」(Bryan, 1979, p. 44) と

した Bryan による理論仮説に修正が必要であることを意味している。

ヨット参加者を対象とした Kuentzel and Heberlein (1997) は、社会的地位を基礎とした概念枠組みと専門志向化を測定する変数の1つである参加形態を基礎とした概念枠組みの有効性を比較している。仮説検証では、社会的地位と専門志向化の連続体の関わりは検証できなかったが、参加形態の枠組みは専門志向化指標の項目において有意な差が示されたことから支持される結果となった。つまり、参加形態による単一変数によって分類された下位グループが専門志向化の連続体に沿って配列されることが明らかにされて、専門志向化の測定指標による概念枠組みの有効性が確かめられた。

4. 専門志向化の概念枠組みを用いた実証研究

専門志向化の理論は、ある特定のレジャー活動に取り組む参加者を類型化するための概念枠組みとして、多くのレジャー行動研究に適用されてきた。ここでは、専門志向化の連続体における発達過程のレベルを独立変数とし、レジャー行動を従属変数とした実証研究についてレビューしていく。これらの実証研究は、レクリエーション空間における他の参加者に対する態度を扱った研究と、レジャー活動を行う場面における参加者の態度を扱った研究に分けることができる。

まず、レクリエーション空間における実証研究では、コンフリクト、集団規範、混雑感といった参加者間で認知される態度が取り上げられている。

Devall and Harry (1981) は、レジャー活動で使われる用具のタイプや技術の違いに着目し、貯水池周辺における参加者間で誰が誰を嫌うのか、という社会的コンフリクトの関係を扱っている。ここでは、高度な技術が求められる専門志向化レベルの高いレジャー活動の参加者は、技術をあまり必要としない専門志向化レベルの低いレジャー活動の参加者から反感を抱かれるが、後者は前者から反感をもたれることはない、という仮説が検証されている。そのことから、専門志向化レベル

が同じ程度のグループ内でよりも、他のグループの専門志向化レベルが異なる参加者間で互いに反感をもち合うことが明らかにされた。

Wellman et al. (1982) は、専門志向化レベルの違いによる集団規範の相違に焦点を当て、レクリエーション空間を利用する際のマナーについて調べている。この研究では、カヌー参加者が他の参加者のどのような行動を軽蔑的な行動と見なすのかという態度を、専門志向化レベルの高い参加者と低い参加者と比較した。その結果、軽蔑的な行動として取り上げたいいくつかの項目で差がみられ、専門志向化の概念がカヌー参加者の集団規範を説明するのに有効であることが確認されている。

Hammit et al. (1984) は、専門志向化の影響を受けにくいレジャー活動に着目し、レクリエーション空間を共有する参加者間の心理的状态に影響を及ぼす要因について研究を行った。ここでは、チュービング（タイヤチューブを使った川下り）が研究対象とされて、専門志向化レベルの低い参加者における混雑感（perceived crowding）が明らかにされている。チュービング参加者においては、活動前に認知される混雑感に対する期待が活動中の混雑感に影響しない、という仮説が支持され、混雑感に対する期待と知覚があまり関係していないことが分かった。むしろ、活動場面における実際の利用者数や他の参加者との遭遇というような状況変数が混雑感を規定することが認められている。

このことについて Graefe et al. (1985) は、専門志向化レベルの低い参加者においては活動前に場面への期待や選好が認知されていないために起こることであると推論し、ハイキング参加者を対象とした追試を行っている。その結果、Hammit et al. (1984) の研究結果と同様に、混雑感に対する期待は知覚に影響せず、活動場面での他の参加者との遭遇が選好レベルを越えたときに混雑感を知覚することが明らかとなった。また、より専門志向化された参加者ほど他の参加者との遭遇を好まず、活動場面における混雑感に敏感であることが判明している。

ところが、ラフティング、カヤック、カヌーの参加者を対象とした Tarrant et al. (1997) の研究では、専門志向化レベルが低い参加者よりも高い参加者の方が、他のカヤックやカヌー参加者と遭遇することが気にならないとする傾向がみられた。専門志向化レベルと遭遇の関係を扱った従来の研究に反する結果が得られたことについては、カヤックとカヌーの参加者が、同じ活動の参加者に遭遇することに無関心であるためと推察されている。

一方、レジャー活動を行う場面における実証研究では、動機づけ、選好、代償行動といった参加者の活動に対する態度が取り上げられている。

Virden and Schreyer (1988) は、専門志向化レベルの異なるハイキング参加者の野外環境における物理的、社会的、管理的場面に対する選好を明らかにしている。ここでは、より専門志向化された参加者は特別な環境属性にこだわる、という仮説が検証された。その結果、専門志向化レベルが環境場面に対する価値と選好を規定することが分かっている。しかしながら、専門志向化レベルの高いスペシャリストが特別な環境に対する選好をもつことは確認されず、専門志向化の概念と一致する結果が得られなかった。

フィッシング参加者を対象とした Chipman and Helfrich (1988) は、専門志向化レベルが異なる参加者において動機づけ、行動の知覚、マネジメント面の選好に違いがみられるかを調べている。この結果から、専門志向化レベルが低い参加者は過去の経験が動機づけとなり、専門志向化レベルが高い参加者は釣果に直接的に関係することが動機づけとなることが分かった。このことは、専門志向化の概念を用いることでタイプの異なる参加者の行動を予測することが可能であることを示唆している。

Choi et al. (1994) は、社会的集団の構成、代替活動の内容、専門志向化レベルが、レクリエーション場面の選択における代償行動に与える影響を吟味している。ここでは、釣行に出かけたがフィッシングをすることが困難な状況になった場合に、専門志向化レベルが高い参加者ほど他の活動

に切り替える可能性が低くなる, という仮説が設定された。しかしながら, 専門志向化レベルによる代償行動に対する規定力が弱かったため, この仮説は立証されなかった。むしろ, 社会的集団の構成が強く影響し代償行動を引き起こす可能性が高くなる, ということが明らかにされている。

5. 専門志向化の実証研究における方法論

表1は, 専門志向化の概念を用いた実証研究についてまとめたものである。ここでは本表に基づき, 1977年から1997年の間に発表された16件の

論文にみられる研究対象, データ収集, 測定指標, サンプルの類型化のそれぞれの手続きについて方法論上の検討を加えていく。

1) 研究対象としてのレジャー活動

はじめにBryanがマスを対象魚としたフィッシングに専門志向化の概念を導入したが, のちにバス・フィッシング, 海でのフィッシングの研究が行われた。水辺レクリエーション地帯の活動では, チュービング, カヌー, ボート, ラフティングやカヌー, ヨットを扱った研究がある。また, 自然観察, スイミング, フィッシング, カヌー,

表1 「レクリエーションの専門志向化」の実証研究における方法

著者 (発行年)	研究対象	データ収集	測定指標	類型化の基準
Bryan (1977)	フィッシング参加者	参与観察・インタビュー法	行動・認知局面	タイプ別
Devall and Harry (1981)	貯水池利用者	インタビュー・郵送法	行動局面	タイプ別
Wellman et al. (1982)	カヌー参加者	インタビュー法	行動・認知・感情局面	四分位数
Hammitt (1984)	チュービング参加者	参与観察・インタビュー法	—	—
Graefe et al. (1985)	ハイキング参加者	インタビュー法	行動・認知局面	合成得点
Donnelly (1986)	ボート参加者	郵送法	行動・認知・感情局面	タイプ別
Viriden and Schreyer (1988)	ハイキング参加者	インタビュー・郵送法	行動・認知・感情局面	—
Chipman and Helfrich (1988)	フィッシング参加者	インタビュー・郵送法	行動・認知・感情局面	クラスター分析
McIntyre and Pigram (1992)	オートキャンプ参加者	インタビュー法	行動・認知・感情局面	クラスター分析
Ditton et al. (1992)	フィッシング参加者	郵送法	行動局面	四分位数
Kuentzel and Heberlein (1992)	ハンティング参加者	郵送法	行動・認知・感情局面	タイプ別
Kuentzel and McDonald (1992)	カヌー参加者	インタビュー・郵送法	行動・認知・感情局面	因子分析
Scott and Godbey (1994)	トランプゲーム参加者	参与観察・インタビュー法	行動・認知・感情局面	タイプ別
Choi et al. (1994)	フィッシング参加者	郵送法	行動局面	四分位数
Kuentzel and Heberlein (1997)	ヨット参加者	郵送法	行動・認知・感情局面	タイプ別
Trant et al. (1997)	カヌー・ラフティング参加者	郵送法	行動・認知局面	合成得点

ウォータースキー、ハンティング、キャンプといった貯水池で行われるレジャー活動全般の参加者を対象とした研究もみられる。山岳レクリエーション地帯の活動では、ハイキング、オートキャンプ、ハンティングの研究が行われている。これまでみてきたように、専門志向化研究は野外環境において身体活動を伴うレジャー活動への適用だけであった。しかし Scott and Godbey (1994) は、トランプゲームに専門志向化の概念を適用することで、はじめて室内におけるレジャー活動にもこの概念を導入した。

専門志向化研究の対象は、野外における多くのレジャー活動に拡がりをみせ、さらに室内におけるレジャー活動に及んでいる。専門志向化の概念の幅広い適用可能性が示唆されるが、新たなレジャー活動に専門志向化の概念を適用する際には、その活動の周辺状況にまで及んで情報を収集して適合性を検討することが必要であろう。

2) データ収集の方法

ある特定のレジャー活動の参加者を対象とする専門志向化研究では、母集団の特定ができないことによって、厳密な意味での悉皆調査や無作為抽出による標本調査を行うことが困難である。したがって、レジャー活動の場面において研究対象と接触するなかでデータが収集されることが多い。

Bryan (1977) は参与観察法により、フィッシング参加者を対象としてフィールドでのインタビューを実施し、さらにフィッシングの場面における補足的な情報を収集した。この事例研究の追試として、Bryan (1979) は文献調査とフィッシングの専門家を対象としたインタビュー調査を行っている。また、Scott and Godbey (1994) は、ブリッジの社会的世界を探究するため、参与観察法による記録、プレイヤーへのインタビュー、資料提供者 (informant) からの情報、関係する出版物からのデータを整理した。

多くの実証研究においては、主にフィールドでのインタビューと郵送法による調査が実施されている。インタビューにおいては、河川、ハイキングコース、キャンプ場というような実際に活動が行われるフィールドに赴くことによって調査対象

を確保することができる。郵送法による調査に関しては、二種類の手続きが取られている。1つは、レジャー活動の組織が作成した登録名簿や、他の調査で得られた調査名簿から選び出された調査対象に調査票を郵送する方法である。もう1つは、フィールドでレジャー活動に参加している人に郵送法による調査の承諾を得る方法である。住所を聞き出して郵送による調査を実施する場合と、簡単な質問項目による一次調査を実施して、二次調査として郵送による調査を実施する場合がある。

専門志向化研究のデータ収集は、主にレジャー活動が行われるフィールドでサンプルを確保することが求められる。しかし、フィールドでのインタビューだけでは、回答者に多項目に及ぶ調査に応じてもらうのは難しいであろうし、サンプル数の確保にも問題があろう。詳細な質問内容の調査を実施するためには、参加者の住所録を確保して郵送法による質問紙調査を併用するのが有効であることが先行研究から窺える。

3) 専門志向化概念の測定指標

専門志向化という概念の測定には、Bryan の一連の研究 (1977, 1979) により、参加状況、技術レベル、場面選好といった変数が用いられてきた。しかし、Buchanan (1985) がこのような観察可能な特性だけで測定することの危険性を唱え、McIntyre and Pigram (1992) がコミットメントや関与といった感情的愛着が従来までの測定に含まれていないことを指摘した。これらの指摘を受け、その後の多くの研究においては、Bryan が提唱した行動局面と認知局面に感情局面が加えられて、より包括的な多次元の測定指標が作成されるようになった。その一方で、Ditton et al. (1992) や Choi et al. (1994) は年間参加回数、Kuentzel and Heberlein (1997) は参加形態のみの単一変数で専門志向化の測定を行ってもいる。それらは、専門志向化の次元と従属変数の間に関連性をもたせないようにする意図があつてのことであり、複数の項目からなる指標を作成するがために従属変数との間に相関関係が生じてしまうことを避けるためである。

多次元からなる測定指標の作成にあたっては、

二通りの手続きが取られている。1つが先行研究を検討して専門志向化の次元を導き出し、それらに含まれる項目を選出して採用する方法である。もう1つが、因子分析や相関分析を用いて、先行研究で挙げられた項目を意味のある構成要素に再編成して新たな次元を抽出する方法である。このようにして測定が行われているが、それらの尺度が専門志向化を正確に反映しているのかという妥当性と、繰り返し安定した結果が得られるのかという信頼性が問われるところである。Wellman et al. (1982) は、それぞれの回答者について指標得点を算出し、測定指標の次元内における項目の相関を分析することで尺度の妥当性を評価している。また、尺度の信頼性については、測定指標の次元内における信頼性係数 (Cronbach Alpha) が算定され、測定項目の内的整合性 (internal consistency) の高さが確認されている (Wellman et al, 1982 ; Donnelly, 1986 ; Virden and Scheyer, 1988 ; Chipman and Helfrich, 1988 ; Kuentzel and Heberlein, 1992 ; Kuentzel and McDonald, 1992 ; Kuentzel and Heberlein, 1997)。

専門志向化の測定については、行動、認知、感情の三局面による多次元の測定指標が開発されているが、Kuentzel and Heberlein (1997) のように従属変数との関連性の問題から単一の測定項目で測定することを主張する研究者もいる。今後の専門志向化研究において、測定指標を単純化するか、包括的に捉えるかは重要な課題になる。

4) 専門志向化の概念枠組みによるサンプルの類型化

専門志向化の概念枠組みは、サンプルを類型化する有効な変数となり、レジャー行動を分析して把握するために用いられる。ここでの分析では、サンプルを有意な下位グループに分割する手法が取られることが多い。Wellman et al. (1982) は、指標による得点を四分したのち、その中間に属する二分位を除いて、上限と下限のグループを比較している。Ditton et al. (1992) と Choi et al. (1994) は、四分位をそのまま用いて4つのグループに分けている。Graefe et al. (1985), Don-

nely et al. (1986), Tarrant et al. (1997) は、指標により測定された得点を合計し、その合成得点を基に「高」「中」「低」のグループに分割した。また、指標から得られたデータにクラスター分析を行ったChipman and Helfrich (1988) と McIntyre and Pigram (1992) は、それぞれ6つと4つのグループに分類している。

下位グループに分割する以外にも、専門志向化指標の得点を連続データとして用いて分析を行う方法が取られることがある。Virden and Schreyer (1988) は、個人レベルの得点を標準化して結合し全体的な指標得点に変換した上で、従属変数との相関関係を検討している。Kuntzel and McDonald (1992) は、因子分析を用いることによって専門志向化の因子得点と従属変数との相関関係を分析している。

専門志向化研究におけるサンプルの類型化は、専門志向化の発達過程におけるステージによって下位グループに分類することになる。その際に、研究の目的に応じた最適な類型化を行うことが求められる。専門志向化の理論上、発達過程における連続体の配列に従ったグループに分割できる、なおかつ、統計上の分布に適合する手法を選ぶことが重要である。

IV まとめと課題

本研究では、「レクリエーションの専門志向化」の概念を扱った論文を中心に、理論の展開および実証研究の成果に分けて整理することで研究動向を把握し、実証研究にみられる方法論について検討してきた。

専門志向化研究における理論の展開は、Bryan (1977, 1979) が野外におけるレクリエーション参加者を類型化するための概念枠組みを提示した上で、一連の事例研究から専門志向化の連続体についての理論仮説を導き出したことに端を発する。その後、専門志向化の連続体の測定指標と発達過程をめぐる議論がなされてきた。

専門志向化の測定指標においては、McIntyre and Pigram (1992) が、専門志向化の連続体を

測定する指標に感情的局面が構成要素として含まれていないことに問題があるとし、包括的な専門志向化モデルを提示した。これを受けて専門志向化の連続体を反映する多次元の測定指標が開発されるようになった。その一方で、Kuentzel and McDonald (1992) は、多次元化されてきた測定指標が専門志向化の複雑な発達過程に対応しきれていないことを指摘した。また、Kuentzel and Heberlein (1997) は単一変数による概念枠組みが専門志向化の連続体を説明するのに有効であることを検証している。

専門志向化の発達過程においては、レジャー活動の階層モデルを提示した Donnelly et al. (1986) が、専門志向化の程度と範囲についての仮説検証を試みたが、専門志向化レベルの捉え方にかかわる操作上の問題点を積み残している。Kuentzel and Heberlein (1992) は、活動場所の選択行動による専門志向化の発達過程の違いを分析したが、理論仮説に従う相違点を見出すことができなかった。専門志向化の概念を社会的世界の観点から見直した Ditton et al. (1992) は、その解釈を拡張することで再概念化している。また Scott and Godbey (1994) は、時間の経過に伴い専門志向化の連続体の高いステージに移行するとは限らないことを突き止めて専門志向化理論に異論を唱えた。以上のように専門志向化理論を扱った研究では、測定指標と発達過程の2つの側面から検証が繰り返され、課題を残しながらも理論が強化されてきていることが分かる。理論上の課題として挙げられることは、Scott and Godbey (1994) が指摘しているように、レクリエーション参加者が必ずしも従来の連続的な発達過程をたどるとは限らないという問題である。これは専門志向化の概念の核となる部分であるが、横断的調査 (cross-sectional survey) では、発達過程の一時点におけるレジャー行動の分析に終わってしまうという限界がある。Kuentzel and McDonald (1992) が提唱するように、縦断的なパネル調査 (panel survey) を実施することで同一サンプルの発達過程を追跡するための時系列分析を行うことが今後の研究に望まれる。

専門志向化研究における実証研究では、専門志向化の概念枠組みが用いられることによって、参加者間におけるコンフリクト、集団規範、混雑感の知覚や、参加者の活動に対する動機づけ、選好、代償行動といったレクリエーション参加者の野外環境における行動との関係が明らかにされ、その有効性が確認された。これらの研究成果は、レクリエーションの場面におけるマネジメントにとって有益な情報を提供している。つまり専門志向化研究は、理論的に裏づけられた測定指標を用いることで、レクリエーション参加者を意味のあるグループに類型化する有効なマーケット・セグメンテーションのアプローチとしてレジャー行動の理解に貢献してきたのである (Ditton et al., 1992)。

専門志向化の実証研究にみられる方法論上の傾向としては、次のことが見い出された。専門志向化研究の対象となるレジャー活動は、もともと野外で行われるレジャー活動であったが、その適用範囲は拡大されて室内で行われるレジャー活動にまで及んでいる。専門志向化研究におけるデータ収集は、レジャー活動が行われるフィールドでサンプルを確保してインタビューを実施することが多く、より詳細な質問内容については郵送法による質問紙調査が併用される。専門志向化概念の測定指標は、行動局面と認知局面に感情局面が加えられ、より包括的な指標が開発されて多次元の指標を用いるのが主流となっている。そして、専門志向化の概念枠組みによるサンプルの類型化は、下位グループに分割するための統計手法として、四分位数や合成得点が用いられ、クラスター分析が行われたりすることが多くみられる。

方法論上の課題としては、測定指標を精査していくことが挙げられる。これまで多次元からなる専門志向化の測定指標が開発されてきているが、単一変数による概念枠組みの有効性も指摘されている。測定指標の多次元化と単純化については研究者により意見が分かれるところであるが、追試を繰り返しながら経験的に指標の妥当性と信頼性を高めていくことが求められよう。

以上みてきたように、レクリエーションの専門志向化研究は、レジャー活動に取り組む参加者の

発達過程である連続体に着目したことで、参加者を同質のグループに類型化するための有効な概念枠組みを提示することができた。その後、専門志向化の概念は理論構築を試みた研究が積み重ねられ発展してきている。また、理論的に裏づけられた概念枠組みは、多くの実証研究に採用されレジャー行動を把握することに貢献し、レクリエーションの場面におけるマネジメントに役立つ情報を提供してきた。したがって、わが国におけるレジャー・レクリエーションの領域に専門志向化の概念を導入することは、日本人のレジャー行動を理解することに大いに役立つものと考えられる。

北米で発展してきた専門志向化の概念を導入するにあたっては、日本人の国民性や文化的土壌の違いに注意を払いながら概念の整合性を確認する必要がある。そのためには、専門志向化の概念を最初に提唱したBryan (1977, 1979) や初めて野外環境以外のレジャー活動に専門志向化の概念を適用したScott and Godbey (1994) が行ったように、フィールドワークを実施することによってレジャーの社会的世界の観点から探究していくことが望ましいであろう。フィールドワークにおいては、参与観察、インタビュー、文献調査、資料提供者を情報源としたデータを収集し分析することで、研究対象としたレジャー活動固有の特性を吟味することができると考えられる。

謝辞

本研究の文献収集においては、在外研修のために渡米されていた現順天堂大学野川春夫教授から多大なる御尽力を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

注

注1) Bryan (1977, 1979) による、この用語の定義には、レジャー活動に取り組む様式を参加者が自ら方向づけていく、という意味合いが込められているため、「レクリエーションの専門志向化」の邦訳をあてる。

注2) Bryan (2000) は、レジャー活動に参加して自らが経験したコンフリクト、とりわけスポー

ツ・フィッシングの参加者同士でモラルや行動の違いによって衝突が起こっていることが問題意識となって専門志向化研究に取り組んだことを述べている。

注3) データベース“Sport Discus”には、1975年以降に発表されたスポーツ、レジャー、フィットネスに関連する50万件以上の文献が収録されており、毎年、2万2千件以上が追加収録されている。

注4) レジャーの社会的世界とは、ある特定のレジャー活動に参加する人々に主観的に体験され、そのことによってコミュニケーションが成立する範囲である。Devall (1973) は、組織に所属することによる形式上の境界線が定められているわけではなく、共通の興味、関心、態度、価値を保持する準拠集団により構成される文化領域である、と説明している。

文 献

- Bloch, P.H., and Bruce, G.D. (1984) Product involvement as leisure behavior. *Advances in Consumer Research* 11: 197-202.
- Bloch, P.H., Black, W.C., and Lichtenstein, D. (1989) Involvement with the equipment component of sport: Links to recreational commitment. *Leisure Sciences* 11: 187-200.
- Bryan, H. (1977) Leisure value systems and recreational specialization: The case of trout fishermen. *Journal of Leisure Research* 9: 174-187.
- Bryan, H. (1979) Conflict in the great outdoors: Toward understanding and managing for diverse sportman preferences. *The Birmingham Publishing: Alabama*, pp. 1-98.
- Bryan, H. (2000) Recreation specialization revisited. *Journal of Leisure Research* 32: 18-21.
- Buchanan, T. (1985) Commitment and Leisure Behavior: A theoretical perspective. *leisure sciences* 7: 401-420.
- Chipman, B.D., and Helfrich, L.A. (1988) Recreational specializations and motivations of Virginia river anglers. *North American Journal of Fisheries Management* 8: 390-398.
- Choi, S., Loomis, D.K., and Ditton, R.B. (1994) Effect of social group, activity, and specialization on recre-

- ation substitution decisions. *Leisure Sciences* 16: 143-159.
- Devall, B. (1973) The development of leisure social worlds. *Humboldt Journal of Social Relations* 1: 53-59.
- Devall, B., and Harry, J. (1981) Who hates whom in the great outdoors: The impact of recreational specialization and technologies of play. *Leisure Sciences* 4: 399-418.
- Ditton, R.B., Loomis, D.K., and Choi, S. (1992) Recreation specialization: Re-conceptualization from a social worlds perspective. *Journal of Leisure Research* 24: 33-51.
- Donnelly, M.P. (1985) Within and between activity comparisons of recreation specialization. University of Maryland, pp. 1-133.
- Donnelly, M.P., Vaske, J.J., and Graefe, A.R. (1986) Degree and range of recreation specialization: Toward a typology of boating related activities. *Journal of Leisure Research* 18: 81-95.
- Graefe, A.R., Donnelly, M.P., and Vaske, J.J. (1985) Crowding and specialization: A reexamination of the crowding model. *The National Wilderness Research Conference*, pp. 333-338.
- Hammit, W.E., McDonald, C.D., and Noe, F.P. (1984) Use level and encounters: Important variables of perceived crowding among nonspecialized recreationists. *Journal of Leisure Research* 16: 1-8.
- 原田宗彦 (1982) 北米における余暇行動研究の動向. *レクリエーション研究* 9: 35-44.
- 原田宗彦 (1989) 諸外国におけるレクリエーション研究の動向. 池田勝ほか共著 *レクリエーションの基礎理論*. 杏林書院: 東京, pp. 239-258.
- ホームズ, G.C.: 橋本 茂訳 (1978) *社会行動その基本形態*. 誠信書房: 東京, pp. 21-73.
- Kelly, J.R. (1974) Socialization toward leisure: A developmental approach. *Journal of Leisure Research* 6: 181-193.
- Kuentzel, W.F., and Heberlein, T.A. (1992) Does specialization affect behavioral choices and quality judgements among hunters?. *Leisure Sciences* 14: 211-226.
- Kuentzel, W.F., and McDonald, C.D. (1992) Differential effects of past experience, commitment and lifestyle dimensions on river use specialization. *Journal of Leisure Research* 24: 269-287.
- Kuentzel, W.F., and Heberlein, T.A. (1997) Social status, self-development, and the process of sailing specialization. *Journal of Leisure Research* 29: 300-319.
- McIntyre, N., and Pigram, J.J. (1992) Recreation specialization reexamined: The case of vehicle-based campers. *Leisure Sciences* 14: 3-15.
- Scott, D. (1990) An analysis of adult play groups: Theoretical and empirical considerations. *The Pennsylvania State University*, pp. 1-340.
- Scott, D., and Godbey, G. (1994) Recreation specialization in the social world of contract bridge. *Journal of Leisure Research* 26: 275-295.
- Silver Platter Information (2000) *Sport DISCUS*, 1975-December 2000, Silver Platter Information, Inc.
- Tarrant, M.A., Cordell, H.K., and Kibler, T.L. (1997) Measuring perceived crowding for high-density river recreation: The effects of situational conditions and personal factors. *Leisure Sciences* 19: 97-112.
- Virden, R.J. (1986) The effects of recreation specialization and motivations on the environmental setting preferences of backcountry hikers. *Utah State University*, pp. 1-237.
- Virden, R.J., and Schreyer, R. (1988) Recreation specialization as an indicator of environmental preference. *Environmental and Behavior* 20: 721-739.
- Wellman, J.D., Roggenbuck, J.W., and Smith, A.C. (1982) Recreation specialization and norms of depreciative behavior among canoeists. *Journal of Leisure Research* 14: 323-340.

(平成13年6月11日受付)
(平成14年2月23日受理)